

唐代諸家の兼修狀況

岡田 宜法

一

唐代二百八十餘年間の佛教は、唐代の文化と共に一大偉彩を放つた時代であるから、念佛宗は勿論、法相、華嚴、律、密教等の中心巨匠は孰れも前代を凌ぎし觀があつた。禪門に於ても同様に教勢甚だ盛んであつた結果、五家の分立的有様となる。更に宋代の初に入りて楊岐黃龍の二派が臨濟系より分れて、こゝに五家七宗と稱せらるゝに至つたのである。

而して念佛方面にありては、善導流と慈愍流と相對峙したが、慈愍流は後代への影響は善導流の比では無く、其念佛は禪淨混淆的であり、宋高僧傳（廿九卷）に傳ふる『往生淨土集』の如きも散逸して傳承しないやうである。然るに宋の永明延壽は『萬善同歸集』に、坐禪中に昏昧來らば起行道念佛して重障を除くべく、徒らに一方のみを確執するが如きは決して究竟のものでは無いとして其例證に慈愍三藏の語を引て居る。即ち、

慈愍三藏云。聖教所說正禪定者。制_レ心一處。念念相續。離_レ於昏掉。平等持_レ心。若睡眠覆障。即須_レ策勸念佛誦經禮拜行道講經說法。教_レ化衆生。萬行無_レ廢。所_レ修行業。回向往_レ生西方淨土。若能如_レ是。修_レ習禪定_レ者是佛。禪定與_レ聖教_レ合。是衆生眼目。諸佛印可。一切佛法。等無_レ差別。皆乘_レ一如。成_レ最正覺。

とある。宋高僧傳によれば慈愍が印度に遊びて諸國の學者に問法した當時は皆な一樣に淨土を讚じて居たとあり。而して在印十有三年にして歸朝せんとし北印の健駄羅ガンダラを過ぐるや、王城の東北に一大山あり、山頂に觀世音像を安置す、慈愍は像前に祈請すること一七日、叩頭斷食畢命を期と爲したのである。然るに七日目の夜半に觀世音、空中に丈餘の紫金の色相を現し、寶蓮華に坐し、右手を垂れて慈愍の頂を摩して『汝、法を傳へて自利利他せんと欲せば、西方淨土は極樂の世界彌陀の佛國である。勸めて念佛誦經して迥かに往生を願はしむべし。彼の國に到れば佛を見、大利益を得べし、故に淨土の法門は諸行に騰過することを知るべし』と説き已て忽ち滅すとあるから、彼が淨土は勿論客觀的存在であるけれども、而も禪淨混淆の態度にあることは明白である。

二

然るに善導の念佛は、曇鸞道綽を相承し、法然はまた善導の旨によりて日本淨土宗を創唱して居る關係にて知り得らるゝ如く、善導は飽迄も稱名正因を主張し、稱名を以て本願生因の正定業と爲し、之を正中の正とし、凡入報土を力説する絶對他力一佛稱名の往生である。故に彼は要門と弘願の二門を設け、要門は淨土門中の自力的方面であつて、利根を導きて淨土に入らしむる方便施設であるけれども、弘願は淨土門中の絶對他力の方面であつて、彌陀本願の正意を示す眞實教であるとするのである。この態度は『觀經』に初めに要門から弘願に轉ぜしむる目的の爲に二門を立てしより來つたとされるから、要門方便、弘願眞實と云はれて居る。されば稱名一佛の純他力往生の善導と雖も、一面には正行と雜行とを認め、其正行の中に於ても讀誦禮拜稱名讚嘆供養の五種を數へて居るから、好んば其意義に主伴輕重ありとするも、自力的

部門を絶対に否定する者とは云はれまい。が然し慈愍や慧遠流の念佛とは自ら其類を異にすることは云ふまでもない。

三

翻つて當時の禪門を見るに、初唐時代は四祖道信、五祖弘忍、六祖慧能の諸師を挙げねばならぬ。四祖の禪系統は初唐の貞觀年中に二分せられて一は牛頭禪となり他は五祖系の禪となつたが、畢竟するに純一にして無雜の禪たることは一である。然るに牛頭法融下第四世に江陵法持の名が『佛祖統紀』第廿七卷の往生高僧傳中に掲げられ、

法持江寧人。見_ニ黃梅忍禪師_一悟_ニ心要_一。繼_ニ牛頭祖位_一。常繫_ニ念淨土_一。俯仰不_レ違。將_レ終戒_ニ弟子_一。露_ニ骸松下_一。令_レ禽獸食_ニ我血肉_一。起_中淨土因_上。弟子如_ニ其旨_一。見_ニ神幡數十_一。西來遶_ニ山_一。幡出_ニ異光_一。以燭_ニ其室_一。

とある。また宋の戒珠が撰に成る『淨土往生傳』卷之中にも『持於_ニ淨土_一以繫_ニ于念_一凡九年。俯仰進止必資_ニ觀想_一』とあれば、禪の正傳系に於ける淨業兼修者としては最古に屬する者であり、更にこれと前後して五祖弘忍門下に宣什出でて淨業を兼修して居る。宣什に關する資料は甚だ乏しいが、宗密の『圓覺經大疏鈔』卷三には、

然彼令_ニ一字佛_一。初引_レ聲由_ニ念_一。後漸々沒_レ聲。微聲乃至無聲。送_レ佛至_レ意。意念猶麤。又送至_レ心。念々存_レ想。有_レ佛恒在_ニ心中_一。

とある。然し當代の禪僧は何としても禪風盛大を究めた時であるから打坐三昧を以て第一義とした關係上、兼修者の稀れなることは當然である。加之、當代の禪者としては寧ろ六祖系と神秀系との頓漸的家風の對峙が中心的な問題として他を顧るの餘地が充分ではなかつたとも思はれる。

四

六祖慧能禪師も淨土と彌陀とが問題にされた。尤も六祖壇經の全部を無條件に承認することは問題とされるが、大體に於て思想的に承認して不可はあるまい。壇經の淨土に就ては疑問第三、定慧第四、付囑第十等に明かであるが、要するに淨土も彌陀も之を主觀的に存在とする所に其特色が存する。所以に、

凡愚不_レ了_二自性。不_レ識_二身中淨土。願_レ東願_レ西。悟人在處一般。所以佛言、隨_二所住處_一恒安樂。

先除_二十惡_一即行_二十萬_一。後除_二八邪_一乃過_二八千_一。念念見性常行_二平直_一。到如_二彈指_一便覩_二彌陀_一。

若於_二一切處_一行住坐臥純一直心。不_レ動_二道場_一直成_二淨土_一。此名_二一行三昧_一。

と云ふやうに絶對主觀論である。されば其嗣南陽慧忠國師の如きも念佛淨土問題に對して『性卽是佛。性卽是淨土』と主張して本流の祖師禪一貫の思想行持であつた。然るに之に前後して智欽の如きは明かな念佛兼修者であつて、鄭州の阿育王塔に一臂を焼て淨土往生を願求したと傳へられるが。六祖下直後の青原と云ひ南嶽と云ひ、荷澤神會、永嘉玄覺、馬祖道一、石頭希遷、南泉普願、藥山惟儼、趙州從諗等、悉く純禪の宗將であり、其外詩星としては寒山拾得の如き白居易の如き、或は又龐居士の如き、宗密の如き、雲門、法眼、洞山、曹山等送迎に違なき状態であつたが、この時代よりして正統系の禪風は徐ろに念佛の傾向が附加せらるゝに至つたのである。

五

白居易は唐代の詩星として名あるのみならず禪淨兼修者としても名ある人である。『佛祖統紀』第二十八卷の『往生公卿傳』の筆頭に、

白居易號香山居士。官太子太傅。初勸一百四十八人結上生會。行念慈氏名。坐想慈氏容。願當來世必生兜率。晚歲風痺。遂專志西方。祈生安養。畫西方變相一軸。爲之願曰。極樂世界清淨土。無諸惡道及衆苦。願如我身苦病苦。同生無量壽佛所。一夕念佛坐榻上。倏然而逝。

とある。この詩は雲棲會下の廣貴が編輯せる『蓮邦詩選』の翻然嚮往生第三に『病中畫西方變相願』白香山として掲げられるものと一である。又同書の執持名號第五に『念佛偈』がある。

余年七十二。不復事吟哦。看經費眼力。作福畏奔波。何以度心眼。一聲阿彌陀。行也阿彌陀。坐也阿彌陀。縱饒忙似箭。不廢阿彌陀。日暮而途遠。吾生已蹉跎。且夕清淨心。但念阿彌陀。達人應笑我。多却阿彌陀。達人作麼生。不達又如何。普勸法界衆。同念阿彌陀。

こは白居易が晩年に畫工に西方淨土の圖を畫かしめ、毎日これに向て念佛三昧に入りて往生を發願したものである。白居易は頗る禪味の所有者であるが猶ほ且つ斯の如くであつた。

六

龐居士の如きは主觀的淨土彌陀論者であつて極て巧妙に其方面に於ける壇經の祖述者であり、この點に於て禪中心の禪淨統一とも云はれやうが、こゝに問題となるは百丈大智禪師である。

百丈の古清規は既に業に散逸して見る由もなく、纔かに楊億の序文によりて其内容の一端を想像し得るのみであつて、清規中の淨土思想の存否に關しては一言だも云ふことは出来ない。が然し元代の東陽德輝が『勅修百丈清規』は、古規の初校訂とも稱すべき『禪苑清規』と、其再校とも稱すべき『校定清規』と、而して其三校とも稱すべき『備用清規』の三本を折衷改訂した關係にあるもので、この勅規には相當に淨土思想が存するが、之を以て直ちに古規の淨土思想を繼承したものと云はない。然るに宗本の『歸元直指集』によれば、

且如百丈大智禪師。是江西馬祖道之的。子。天下叢林。依他建立。從古至今。無一人敢議其非。天下清規。依他舉行。從始至末。無事敢違其法。看他爲病僧念誦之規云。集衆同聲舉揚一偈。稱讚阿彌陀佛。復同聲稱念南無阿彌陀佛。或百聲或千聲。回向。伏願云。諸緣未盡。早遂輕安。大命難逃。徑登安養。此非淨土之指歸乎。

とあるより察すれば或は淨土思想の混入があつたかとも思はれる。然しこの想像は極て獨斷的であつて宗本の推定資料は歴史的に如何なる確實性を有するかを明瞭にした後でなくては斷言し得られまい。

七

然るに飛錫禪師の如きは文字通りの禪淨兼修者であることは、師の『念佛三昧寶王論』によつて明らかに承認される。寶王論は『淨土十要』中にも編入せられ、或は『淨土簡要鈔』にも抄録され、また『念佛警策』の中へも収録編入される。寶王論の結構は三卷二十部門に分たれ、上卷には『念未來佛速成三昧門』其他を掲げ、中卷は『念現在佛專注一境門』『此生他生一念十念門』『是心是佛是心作佛門』『高聲念佛向西方門』『無心念佛三身佛破三種障門』を述べ、下卷

は『念過去佛因果相同門』『無心念佛理事雙修門』等を述べて居るから、これ等の題目より見れば多佛の念想稱名であると共に西方願求の思想でもある。『以念佛故。彼佛從心想生。故云是心是佛』とは即心是佛主義の禪の主觀論に外ならぬが、『高聲念佛向西方』の功德五種を擧げて居る客觀淨土の承認とは全く矛盾するものである。けれども師に従へば『無心念佛理事雙修門』に於て、この主客相對の教旨を事理の關係に配當して其間の融會をはかり、主客相即事理雙具の境界に安心と往生との大事を一擧に企てんとする者である。さればこの調和方法が如何やうに批判されるにせよ、師の信念的推論は師に於て絶對のものである。

八

百丈大智のやゝ後輩とも稱すべき宗密は、華禪併究の碩學であり、華台禪の三宗渾一が師の中心思想である。されば一面に教禪の乖離を融和せんと努力せし禪源諸詮都序の主張あるやうに他面に禪淨の調和があるかとも推察されるが、この點に關しては殆んど見ることが出来ない。

完密と同時代にして其思想の繼承者とも云ふべき相國裴休は黃檗に私淑し『傳心法要』に序し、『中華傳心地禪門師資承襲圖』に於て禪の五家七宗の禪風に關して宗密と問答し居るに見るも屈指の參禪者であるが、禪淨相關の資料として何等の手がかりも無い。たゞ『蓮宗必讀』中の『禪門日課』に『示子出家偈裴休居士』に、

含悲送子入空門。朝夕應當種善根。身眼莫隨財色轉。道心須向歲寒存。看經念佛依師教。苦志明心報四恩。他日忽然成法器。人間天上獨稱尊。

とあるは兼修念佛往生を肯定する者と見られやう。けれども『歸元直指集』上卷に『裴相國身心虛偽説』が掲げられてある。即ち

唐相國裴休曰。大衆從ニ無始ニ來。常認爲ニ我身ニ者。是地水火風假合之身。旋聚旋散。屬ニ無常法ニ也。大衆從ニ無始ニ來。常認ニ我心ニ者。是錄慮虛妄之心。乍起乍滅。屬ニ無常法ニ。非ニ我心ニ也。我有ニ眞身ニ。圓滿空寂者是也。我有ニ眞心ニ。廣大靈知者是也。空寂靈知。神用自在含ニ萬德ニ。體絕ニ百非ニ。如ニ淨月輪ニ。圓滿無缺。惑雲見覆。不ニ自覺知ニ。妄惑既除。眞心本淨。十方諸佛。一切衆生。與ニ我此心ニ。之無差別。此即菩提心體也。捨レ此不レ認。而認ニ臭身妄念ニ。隨死隨生。與ニ禽畜雜類ニ。比レ肩受レ苦。爲ニ丈夫ニ者。豈不レ羞哉。

之より見れば居士は本質論的に宇宙的大生命と吾人との一體なることを主張し、而もこの實在は菩提の心體であり、常住不變にして萬德を含める神用自在の靈知であれば、何ぞ念佛往生を要すべきと云ふにあつて、純禪の立場からは正しき人性論であり佛陀觀である。

されば彼が愛子へ示せる『看經念佛』なる態度は第二次的のものであつて、方便念佛として承認したまで、あらう。然しこの態度は決して嚴正なものではなく依然として禪淨の妥協的不徹底の嫌あるものと云はねばならぬ。

九

之を要するに禪門に於て當時に現はれたる宗師家にして後代に其徳化の傳はる者殆んど數ふべからざる状態であり、從つて禪風の各宗を厭して盛んなることも周知の事實であつて、一流の宗匠は専ら純禪正統の教風によりて宗風を擧揚した

結果禪淨の雙修は比較的少く、殊に唐末に於ける臨濟を始め曹洞、僞仰の父子、及び大法眼の如き禪風競起せるに見るも其然るを知るべきである。然るに唐末五代となるや、これ等五家七宗の中心人物は相前後して示寂せられ、北宋の禪風これと大に趣を異にするものがあると共に、禪淨相關の狀況も甚だしく變化し來り、支那に於ける禪淨相關の本舞臺は斯くして愈々佳境に入らんとするものがある。